

久多の木造五輪塔

宮崎 健司

はじめに

二〇一〇年三月、京都市左京区久多中の町に所在する志古淵神社に平安時代後期の制作と思われる木造五輪塔が保存されていることがわかった。¹ 本五輪塔には年紀の墨書があるほか、X線透過装置による撮影などによって納入品の存在も知られ、二〇一二年三月に文化財的価値のきわめて高いものとして京都市指定文化財になった。

志古淵神社が所在する久多地域は、上の町・中の町・下の町・宮の町・河合の五つの集落からなる、滋賀県との県境に接した山村である。康平七年（一〇六四）に藤原氏の法成寺領であったことが知られ、² 十二世紀にさかのぼる古い歴史をもつ地域である。また、志古淵神社は、創建未詳ながら社伝では延暦十二年（七九三）の創建と伝え、確実な史料としては天福元年（一一三三）「久多荘田代注進状」に「上宮敷地三段」「下宮敷地二段」などとみえる。³ また、室町時代より伝わる花笠踊は国の無形民俗文化財に指定されている。このように久多地域および志古淵神社は、古い歴史をもつ地域、神社で、平安時代後期の木造五輪塔を伝存するにふさわしい場所と思われる。⁴

しかしながら、本品に関する伝承は地元は一切残っておらず、伝承を知る手がかりは皆無と行ってよい。そこで本稿では、木造五輪塔の概要を報告すると共に、久多地域に伝来した背景も考慮しながら、墨書等について若干の検討をおこないたいと思う。

一 木造五輪塔の概要

1 外観の観察による知見

久多の木造五輪塔は、檜材様の針葉樹の芯部分で制作され、五輪に方形の基壇を伴うものである。塔高は二九・三糎、基壇部で横八・四糎×奥行七・八糎となっている。保存状態はたいへん良好で傷みが少ない優品といえよう。制作した工人については、本五輪塔の中軸線がやや傾き、削り出しも粗いことなどから、熟練の工人とは思われない。しかし、面取りや水輪部・空輪部の球形の削り出しには注意が払われており、丁寧に仕上げられたものといえる(図1)。

各部分の法量は次のとおりである。

基壇	高八・二糎	最大幅八・四糎
地輪	高五・五糎	最大幅八・一糎
水輪	高四・四糎	最大径七・八糎
火輪	高三・二糎	最大幅七・五糎
風輪	高三・一糎	最大幅七・〇糎
空輪	高四・九糎	最大径六・七糎

本五輪塔の各部には墨書がみられる(図2)⁵⁾。五輪部の四面には種字(梵字)が墨書され、三面(表面・両側面)⁶⁾は、それぞれ「空」「風」「火」「水」「地」をあらわす「ケン」「カン」「ラシ」「バン」「ア」の種字が記されている。⁷⁾また、背面には釈迦如来・多宝如来・阿弥陀如来・観音菩薩・勢至菩薩をそれぞれあらわす「バク」「ア」「キリーク」「サ」「サク」の種字が記されている。

一方、基壇部の四面にも次のような墨書がみられる。



図版Web非公開

図1 久多の木造五輪塔



图 2 木造五輪塔実測図

〔表 面〕「摩訶般若／波羅蜜多／心經觀自在／菩薩」

〔左側面〕「南無阿／彌陀佛／妙法蓮華經」

〔右側面〕「己卯歲／平治元年／十二月九日／施入僧寂念」

〔背 面〕「入道西念」

表面は『般若心經』の冒頭句が記され、左側面には阿弥陀仏への帰依をあらわす念仏と、おそらく『法華經』への帰依をあらわす題目と思われるものが記される。そして、右側面には年紀と施主と思われる僧侶名、背面にも僧侶名が記されている。

これら墨書のうち、空輪部と風輪部の種字が釈迦如来と多宝如来をあらわすのは、『法華經』卷四、見宝塔品第十一に釈迦の『法華經』説法中に多宝塔が出現し、塔内にいた多宝如来が釈迦の教説を讃嘆し、正しいことを証明して、半座を空けて釈迦とともに併座したと説かれることに関わるものと思われる。この種字と基壇部の題目の墨書をあわせて本五輪塔に法華經信仰をうかがうことができよう。一方、背面の火輪部から地輪部にかけて阿弥陀如来と觀音菩薩、勢至菩薩をあらわす種字が記され、阿弥陀三尊をあらわしたものと思われる。この種字と基壇部の念仏の墨書をあわせて本五輪塔に浄土信仰もうかがうことができよう。さらにこれら法華信仰と浄土信仰の要素を示すことから本五輪塔が天台系にゆかりのものであることを想像させる。

基壇部の墨書でもっとも注目されるのは平治元年（一一五九）十二月九日⁸という年紀である。この年紀を信じれば、本五輪塔が五輪塔としてはかなり古い時代の制作例ということになる。

五輪塔の制作は、文献上、十一世紀頃にさかのぼるとされるが、遺品としては十二世紀から確認できる。⁹表1は十三世紀までに年紀の判明する五輪塔の遺品を一覧にしたものである。¹⁰まず、五輪塔の意匠を施した最古のものは①

表1 年紀の判明する平安・鎌倉期の現存五輪塔

	年紀	材質形状	指定	備考	所蔵
①	保安三(一一二二)	瓦文様		最古の五輪塔の造形	(法勝寺小塔院)
②	康治元(一一四二)	銅製錫杖文様	重文	最古の立体五輪塔	静岡・鉄舟寺
③	天養元(一一四四)	土製五輪塔五輪塔	重文		兵庫・常福寺
④	久安三(一一四六)	陶製五輪塔五輪塔	重文	最古の陶製五輪塔・在銘五輪塔	愛知・愛知県陶磁資料館
⑤	長寛二(一一六四)	水晶製経軸軸端(平家納経)	国宝	最古の水晶製五輪塔	広島・厳島神社
⑥	長寛二(一一六四)	銅造梵鐘文様	重文		兵庫・徳照寺
⑦	仁安四(一一六九)	石造五輪塔	重文	最古の石造五輪塔	岩手・中尊寺釈尊院
⑧	嘉応二(一一七〇)	石造五輪塔	重文		大分・個人蔵
⑨	承安二(一一七二)	石造五輪塔	重文		大分・個人蔵
⑩	治承五(一一八一)	石造五輪塔	重文		福島・玉川村
⑪	文治二(一一八六)	木製五輪塔形造像銘札	重文	納入品	静岡・願成就院
⑫	建久八(一一九七)	水晶製三角五輪塔	国宝	納入品	山口・阿弥陀寺
⑬	建久八(一一九七)	銅製錫杖文様	重文		埼玉・歓喜院
⑭	建久九(一一九八)	銅製三角五輪塔	重文		滋賀・胡宮神社
⑮	正治元(一一九九)	水晶製五輪塔	重文	納入品	京都・峰定寺
⑯	建仁八(一二〇三)	板彫五輪塔	重文		三重・新大仏寺
⑰	弘安四(一二八一)	木造五輪塔	重文	最古の木造五輪塔・納入品	奈良・東大寺
⑱	弘安六(一二八三)	木造五輪塔	重文		愛知・性海寺

で、保安三年(一一二二)年に建立された法勝寺小塔院の瓦の文様である。¹⁾ 立体の五輪塔として最古のものは②で、康治元年(一一四二)の銅製錫杖の飾りになるが、単体の五輪塔として制作された最古のものは④で、静岡県湖西窯跡出土の久安三年(一一四六)の陶製五輪塔である。また、石造五輪塔として最古のものは⑦で、仁安四年(一一六九)の中尊寺釈尊院のものであり、木造五輪塔として最古のものは⑬で、五輪塔自体には年紀をもたないが、弘安四年(一二八二)に造立された東大寺の四天王像(重文)の持国天像に納入された小型の木造五輪塔である。つまり、これらの五輪塔の遺品を見渡してみると、平治元年の年紀をもつ本五輪塔は、在銘五輪塔としては二番目に、木造五輪塔としては現存最古の遺品であるといえる。

そこで年紀の真偽を確かめるべく特別行政法人文化財機構奈良文化財研究所の年輪年代研究室の協力によりマイクロフォークスX線CT装置による撮影をおこない、年輪年代の測定をおこなった。しかし、残念ながら有効な測定値をえることができず、年紀を確かめるには至らなかった。ただし基壇部の墨書の書風をみる限り、新しいものと思われず、石造五輪塔のプロポーションの変遷に照らせば、地輪部の全体に対する割合の低さや、水輪部の球体としての不整形さなど、古い形態を示したものと考えられる。¹²⁾ これらの点から判断して、本五輪塔が年紀のとおり十二世半ばにさかのぼる作品として認めうると考える。

この年紀は平治の乱勃発の日にあたつている。本五輪塔と平治の乱とに何らかの関係があるかどうかは未詳とせざるをえないが、興味深い点として指摘しておきたい。なお、これら墨書がすべて一筆かどうかについては、種字の部分と他の墨書では比較しにくいので留保せざるをえないが、基壇部の墨書については、おおむね同筆とみてよいように思われる。ただし背面の「入道西念」と他の三面の墨書とではやや趣を異にしているともいえ、異筆の可能性も考えられよう。

次に基壇部左側面の年紀と僧侶名の墨書だが、これは「施入僧寂念」が本五輪塔を造立したことを示すものと考えるのが妥当であろう。しかし造立の目的については明記されていない。造立目的について、基壇部背面の僧侶名の墨書が関わるものであるならば、「入道西念」の追善供養などが候補としてあげられる。両僧侶の比定については後述することにした。また、保存状態のよさに留意するならば、本五輪塔が仏像の納入品であった可能性もあるのではないかとも思われる。

以上が外観の観察による知見である。次にX線透過装置などによって知られる納入孔および納入品の知見について述べたい。

2 X線透過装置等による観察の知見

本五輪塔に納入品があるのであるのではないかということは、目視により基壇部と地輪部に納入孔らしき切り込みがあることでわかっていった。そのため、まず、大谷大学博物館でX線透過装置による撮影をおこなった。その結果、納入品の状況までは十分に確認できなかったが、当該部分に納入孔があることが確認された(図3・4)。さらに当初わからなかった空輪部にも頂上部から彫り込まれた納入孔があり、その底部にやや不整形な球形の納入品があることも判明した(図5)。その後、上述のマイクロフォーカスX線CT装置による断層写真のデータを、島津製作所分析計測事業部応用

図版Web非公開

図4 基壇部 (X線画像)

図版Web非公開

図3 地輪部 (X線画像)

技術部京都アプリケーション開発センターの協力により三次元に画像化することができた。それによって各納入孔の状況はずいぶんと明らかになった。

まず、基壇部の納入孔は、背面から粗く彫り込まれて不整形な方形をなしている。納入孔内部の法量は、高さ二・八糎×横二・一糎×奥行二・一糎で、厚さ〇・八糎の蓋で閉じられていた。納入品は、納入孔奥に押し込んだ形で、手前に若干の空間があり、削り屑らしきものも確認できる。納入品は、渦巻き状に巻かれており、紙のようなものと思われるが、願文あるいは結縁者の交名などが納められている可能性が考えられよう(図6)。

次に地輪部の納入孔は、基壇部同様に背面から粗く彫り込まれて不整形な方形をなしている。納入孔内部の法量は高さ二・三糎×横一・七糎×奥行一・五糎で、厚さ〇・八糎の蓋で閉じられていた。また納入孔奥半分は手前に比べ高さが低くなっていることがわかる。納入品は、納入孔いっぱい詰り込まれた状況で、渦巻き状に巻かれたようにもみえるが、折り畳んだようにもみうけられる箇所もある。その様子から納入品の材質は基壇部同様に紙類あるいは布類ではないかと思われる。やはり願文あるいは結縁者の交名などが納められている可能性が考えられよう(図7)。

最後に空輪部の納入孔は、頂上部より縦に粗く彫り込まれ、円筒形をなしている。納入孔内部の法量は、径一・四糎(上端)×深さ一・六糎で、厚さ〇・

図版Web非公開

図6 基壇部 (3D画像)

図版Web非公開

図5 空輪部 (X線画像)



図7 地輪部垂直断面 (CT 画像)



図8 空輪部 (3D 画像)



図9 空輪部水平断面 (CT 画像)

八纏の蓋で閉じられていた。基壇部・地輪部とは異なり、納入孔の痕跡が目視で確認できなかったのは、蓋を閉じた後、再整形して仕上げられていたためと思われる。納入品は、丁寧に二重の袋状のものの底部に納められ、納入品の固定のためか詰め物をした状態であった(図8・9)。納入品は径〇・二五纏ほどのやや不整形な球形で、断層映像からきわめて高密度のものと思われる。材質としては、玉・水晶や真珠といったものが考えられよう(図10)。また、二重の袋状のもののうち、外側は、上端を閉じず、底部を丸く閉じた円筒状に織られた布類と思われる、太い糸と細い糸によって織られたものとみうけられる(図11)。内側も底部を丸く閉じた円筒状のものであるが、上部は完全に閉じず、包み込むような状態になっている。このうち内側の袋自体は三層構造にみうけられ、外皮と内皮が薄く、その内側は厚くなっている(図8・11)。材質は外側の袋状のものと印象は異なり、繭や樹皮のようなものではないかと思われる。



図版Web非公開

図 10 空輪部納入品 (CT 画像)



図版Web非公開

図 11 空輪部納入品 (3D 画像)

納入品で注目されるのは空輪部の球形のものである。これが舍利のようなものを想定して埋納されたものであるとするならば、五輪塔の三昧堂起源説との関係で注意される。

古い五輪塔の地輪部が低平で、火輪部の傾斜も緩いことから、そのモデルを三昧堂に求めるものである。十一世紀から十二世紀にかけて墓上に遺骨を納めた塔あるいは堂が造立されたが、寛弘八年(一〇二二)の一条上皇の場合、その形状について「堂一間、其様如三昧堂」^⑬とみえ、久安元年(一一四五)の待賢門院璋子の場合、それが法華三昧堂であったことなどから、その塔あるいは堂は三昧堂であったとされている。三昧堂はおおむね正方形の平面プランをしており、その屋根には舍利を納入する宝珠をあげていることから、この形状がまさに塔をイメージさせ、それが五輪塔の起源とみるのである。^⑭この所説にかかわって、空輪部に舍利状の球形のものを納入する本五輪塔は、五輪塔の三昧堂起源説に密接に関わる遺品として重要といえよう。

さらに球形の納入品を舍利と想定すると、それを納める二重の袋状の素材についてもヒントを与えてくれる。納入品を納める二重の袋状のうち、内側は繭や樹皮のようなものではないかと述べたが、それを考える上で鎌倉時代の納

入品としての蓮の実製舍利容器が注目される。蓮の実製舍利容器の遺品はいくつか伝存するが、そのうち嘉元二年（二三〇四）造立の木造聖徳太子像（南無仏太子像 奈良・伝香寺蔵）の納入品の事例が興味深い。本像納入品の蓮の実製舍利容器は、高さ約二・七糎で、蓮の実に「緑るり（瑠璃）」と「白舍利」二粒を籠め、櫛材の宝珠形の栓をしたものである。この栓も実は五輪塔の上半部、つまり空輪部・風輪部・水輪部をかたどったものであり、蓮の実本体を含めて全体としてまさに五輪塔を模した舍利容器といえる。¹⁵この点、本五輪塔の空輪部にみえる袋が蓮の実である可能性が考えられよう。

なお上述のように本五輪塔が三昧堂起源説や蓮の実製舍利容器との関連性をもつこと自体、本五輪塔の制作年代の古さを示しているものとも考える。

次に基壇部の墨書にみえる僧侶名について考えてみたい。

二 木造五輪塔の墨書僧侶名

1 基壇部の墨書「入道西念」

平治元年の年紀に信をおくとして、十二世紀中頃にしほって、「西念」という僧侶をみると、二人の僧侶があげられる。一人は峰定寺を開山した観空西念であり、もう一人は出土資料にみえる西念である（以下、二人を区別するため、前者を「観空西念」、後者を「西念」とする。¹⁶）。

35 (宮崎) 前者の観空西念は、房号を観空といい、三滝聖人と称されたことが知られるが、生没年は未詳である。『大悲山縁起』¹⁷によれば、武家に生まれ、二十一歳で父の喪にあい、その遺言によって二十五歳で出家したという。また、『法華経』を千五百日も書写し続けたり、常行・常坐三昧にふけるなど天台系の僧侶であったと思われる。『保元物語』

や『大鏡』によれば、保元元年(一一五六)鳥羽院の病に召され受戒の師となっているが、それ以前から交流があったものとみられ、久寿元年(一一五四)鳥羽院の勅願によつて、観空西念は峰定寺を開山し、¹⁸⁾本尊千手観音菩薩坐像、不動明王および二童子像、毘沙門天立像を安置し、¹⁹⁾当寺に住している。峰定寺は、京都市左京区花背原地町に所在する、もと天台系の本山修験宗寺院である。創建後、諸堂が整備されていくが、寺伝によれば、平治元年(一一五九)十月に鳥羽院発願で、藤原通憲(信西)が奉行し、平清盛が工を督して大門を造立したと伝える。観空西念を鳥羽院に引き合わせた人物については藤原通憲ないしは平清盛があげられ、とくに峰定寺と平家の関係の深さから、清盛ではないかと類推されている。

次いで後者の西念は、上述のように出土資料にのみ名をみせる人物で、観空西念にまして関係史料が乏しく、生没年未詳である。ただし、その出土資料によつて幾ばくかの行業を知ることができる。

当該資料は、明治三十九年(一九〇六)十一月に京都市下京区松原通大和大路東入るの地で出土したもので、保延六年(一一四〇)八月付「供養目録」(紺紙金泥)²⁰⁾、永治二年(一一四二)²¹⁾三月付「供養目録」(紙本墨書)²²⁾、康治元年(一一四二)六月付「極楽願往生歌」(紙本墨書)²³⁾などがある。このうち二つの「供養目録」は、西念が康和年間(保延年間(一〇九九〜一一四一))にかけて修した読経・写経・造仏の目録となっており、そこから四十年にわたつておびただしい作善をおこなつていたことが知られる。両目録によれば、西念は保延六年八月九日に「天王寺之西門者極楽之東門通」として「天王寺之西海」に身を投じ往生を遂げようとしたことがあり、両目録もそのためのものであったらしい。また、奉納や転読は鞍馬寺など京辺のみならず、長門や越前の氣比宮、加賀の白山など広範に広がっており、その財力も大きなものがあつたと思われる。

以上、二人の「西念」を紹介したが、史料にみえるあり方を時代を追つてみると、西念から観空西念へと連続して

いるようにも感じられ、同一の人物ではないかとも思われる。しかし、観空西念は二十五歳で出家したというが、西念は保延六年(一一四〇)三月三日に出家し、²⁴⁾それより四十年前の康和二年(一一〇〇)²⁵⁾から在俗ながら仏道修行していたことが確かめられる。もし観空西念と西念が同一人物であるならば、観空西念は五歳から仏道修行していたことになってしまう。したがって、両者は別人と考えるべきであろう。おそらく西念は観空西念より年長で、観空西念が峰定寺を開山した久寿元年(一一五六)頃には、七十代後半以上の高齢であったと考えるべきである。

それでは本五輪塔の墨書「入道西念」に比定するならば、「入道」という言葉に若干問題を有するものの、両者ともに可能性が考えられる。しかし、後述のとおり観空西念がもつともふさわしいものと考ええる。

その理由として、まず第一に観空西念の創建した峰定寺と本五輪塔を伝存した久多地域とに密接な関係を見出すことができるのである。平治元年(一一五九)四月日付「前太政大臣家政所下文案」²⁶⁾には次のようにみえる。

前太政大臣家政所下 大悲山寺

可任彼寺所進注文、以久多・針幡・大見三箇所見作田參拾伍町為寺領事

在

久多田拾伍町

針幡田拾伍町

大見田伍町

右、大悲山寺寺僧注申云、件三箇所田地者、法成寺御料也。而依有便宜、可為寺領。其替立改他所、可為法成寺之領。自余全所申請之、依請、件田地三十五町可為寺領。又作人同隨寺役之由、被下 院宣畢者。件田地三十五町并作人等、可令從彼寺。至于杣山者、為平等院・法成寺修理杣所、經年序也、抑彼作人等、若可立当杣者、任

傍例可勤仕両方之役。兼彼三十五町之外田畠新開田地等、不可成妨、寺僧等宜承知、不可違失、故下

平治元年四月 日案主惟宗

別当右大弁兼遠江守藤原朝臣判 大従主計允阿倍

和泉守藤原朝臣判 大書史主計允兼⁽⁷⁾太后宮属惟宗判

散位藤原朝臣判

少納言兼侍従安芸権守平朝臣判

皇太后宮権大進藤原朝臣

この文書によれば、法成寺領内の田地三十五町が峰定寺領となったことが知られ、その田地のうち十五町は久多に所在していた。また、永暦元年(一一六〇)五月日付「前太政大臣家政所下文案」⁽²⁷⁾には「可令任先度御下文状、免除三滝聖人申請田地參拾伍町内^{久多寺五町}所当年貢雜事等事」とみえ、法成寺領内の三十五町が峰定寺領になったのは、峰定寺開山である三滝聖人つまり観空西念の申請によるものであったことがわかる。さらに後世の史料だが、寛政五年(一七九三)に穉里湘夕が著した『都花月名所』⁽²⁸⁾飛泉には

○久多瀧 大悲山

峯定寺奥院と称す。開山観空上人入定の瀧といふ。今も読経の声風に飭し遠く耳底の客となりぬ。これを訪ねて山中に入れば杉間のあらし飛泉の声と変じ跡なしとぞ。

とみえ、「久多の滝」は峰定寺の奥院であり、観空西念の入定の場所と伝えており、峰定寺と久多の密接な関係を示すがわせる。⁽²⁹⁾

したがって、久多に伝存する本五輪塔の墨書「入道西念」に比定する僧侶としては、峰定寺開山の観空西念がもつ

ともふさわしいと考えるのである。

2 基壇部の墨書「施入僧寂念」

「西念」と同様に十二世紀中頃にしほって、「寂念」という僧侶を探してみると常磐（大原）三寂の一人である寂念があげられる。³⁰ 常磐三寂とは、常磐に別荘をもち「常磐丹後守」と称された藤原為忠（？～一一三六）の三人の息子、寂超・寂念・寂然のことである。

寂念は為忠の二男で、俗名を藤原為業といい、生没年未詳ながら、長承元年（一一三二）頃より寿永二年（一一八三）頃までの足跡がたどれ、若きより歌人として活動していた。父の逝去後、常磐の地を受け継いだらしく、その地に御堂を建立している。父為忠は白河院の近臣で、母の橘大夫女なつともも白河院逝去時に側に控えるなど夫婦揃って白河院に仕えていた。³³ また、為忠は鳥羽院にも仕え、なつともも鳥羽天皇皇后待賢門院藤原璋子の女房になっており、寂念自身もまた待賢門院藏人をつとめている。

寂念の出家時期は判然としないが、俗人としてみえる確かなものは保元三年（一一五八）正月三十日に藏人で対馬守に任じられた史料³⁴で、僧寂念としてあらわれるのは「永万二年重家歌合」で、女の二条院内侍三河と歌合に参加した仁安元年（一一六六）の夏・秋頃のことである。³⁵ したがって、その出家時期は、保元三年正月三十日から仁安元年秋頃までといえよう。時期的にみて墨書「寂念」の候補として十分に想定しうると考える。そうであるならば、寂念の出家は平治元年十二月九日以前ということにもなる。

39 (宮崎) さて、先に基壇部墨書について、「寂念」が「西念」の追善供養のため造立したのが本五輪塔ではなかったかと想定したが、その点にかかわって両者の関係についてふれておきたい。観空西念が鳥羽院と深い関係をもっていたこと

は上述のとおりだが、寂念もまた白河院、鳥羽院および待賢門院と浅からぬ関係にあった。特に鳥羽院をめぐって両者に親交があったとみておきたいと思う。また、観空西念は西行とも親交があったらしいが、寂念もまた「永万二年重家歌合」で西行とともに参加しており、弟の寂然は西行と親しかったことが知られている。このことから西行をめぐっても両者の関係を想定することができよう。さらに観空西念と寂念が「念」の字を共有することから師弟関係も想像させるのである。したがって、本五輪塔の造立目的を「寂念」による「西念」の追善供養であったとひとまず考えておきたい。

おわりに

以上、久多の木造五輪塔の概要を報告するとともに、墨書について縷々憶説を述べてきた。推測を重ねたものになってしまったが、本五輪塔が文化財としてきわめて貴重な遺品であることは指摘できたのではないかと考える。いつか本五輪塔を解体修理することで、納入品が明らかになり、本五輪塔をめぐる諸問題が解明されることを期待して、ひとまず攷筆することにした。

註

- (1) 本品は久多自治振興会の所蔵になるもので、二〇一〇年五月より大谷大学博物館に寄託されている。
- (2) 長承二年(一一三三)七月十二日付「明法博士中原明兼勸注」〔平安遺文〕二二八一号文書。
- (3) 岡田浩佐家文書。
- (4) 志古淵神社には鎌倉時代初めの『大般若波羅蜜多經』(京都市指定文化財・久多自治振興会蔵・大谷大学博物館受託)も伝来している。宮崎健司「京都市左京区久多の『大般若波羅蜜多經』」〔博物館研究〕四七ノ三(五二五)、二〇二二年)参照。
- (5) 図2の実測図は京都市文化財保護課の作図による。

- (6) 納入孔のある面を背面とみて表記する。
- (7) 一般的に五輪の種字は「ア」「バ」「ラ」「カ」「キヤ」であるが、本品の水輪部から空輪部には空点がある。この真言は「大日如來の秘密の真言」として、灌頂後、重ねて修行した上で、教授されるものという(村上泰教氏の教示による)。
- (8) 平治元年十二月九日を新暦に換算すれば、一六〇〇年正月二十六日となるが、平治元年を一一五九年と便宜的に表記する。
- (9) 「解題 納骨五輪塔」(『日本仏教民俗基礎資料集成』二(元興寺極楽坊II)、中央公論美術出版、一九七八年)。
- (10) ①の年紀は建立年次による。③の年紀は伴出した天養元年銘の経瓦による。⑪は願成就院藏不動明王・二童子・毘沙門天像(重文)の、⑫は鉄舟寺藏鉄製宝塔(国宝)の、⑮は峰定寺藏釈迦如來立像(重文)の、⑰は東大寺藏四天王像(重文)持国天像の、それぞれ納入品になる。遺品そのものに年紀をもつのは②④⑥⑦⑩⑪⑬⑭⑯である。
- (11) 法勝寺跡から出土したものとしては、瓦当に五輪塔を描く軒丸瓦や五輪塔文を押し印した平瓦などがある。なお法勝寺跡出土五輪塔文の平瓦と同印でつくられた平瓦が大阪府豊中市山ノ上遺跡や大阪府堺市大保遺跡からも出土している。
- (12) 註(9)に同じ。
- (13) 『権記』寛弘八年七月二十日条。
- (14) 註(9)に同じ。
- (15) 杉崎貴英「蓮の実を用いた祈りのかたち―数珠・副葬・像内納入品」(『Kabunken News Letter』六、二〇一二年)参照。
- (16) 以下、西念については多賀宗準「僧西念」(同氏「論集中世文化史」下〈僧侶篇〉、法藏館、一九八五年)を参照。また観空西念については、中野玄三「峯定寺諸像の系譜―長寛元年造立仁王像の銘文を中心にして」(『国華』九二六、一九七二)も参照。
- (17) 『大日本仏教全書』二二〇(寺誌叢書四)所収。
- (18) 峰定寺については菊池京子「大悲山峰定寺―附 花脊別所の民家―」(『史窓』一三三号、一九五八年)、田中幸江「古刹歴遊① 峰定寺―懸崖の寺―」(『日本美術工芸』四四八、一九七六年)、同氏「信西撰述『大悲山寺縁起』をめぐる諸問題」(『説話文学研究』四一、二〇〇六年)、同氏「京都の北山―大悲山峰定寺をとりまく宗教世界―」(『日本文学風土学会紀事』三二、二〇〇八年)を参照。
- (19) 峰定寺諸像については、中野前掲論文(註(16))を参照。
- (20) 『平安遺文』補六四号文書。
- (21) 永治二年四月二十八日に康治と改元。

- (22) 『平安遺文』 補六七号文書。
- (23) 『平安遺文』 補六八号文書。
- (24) 保延六年八月付「供養目録」に「一、奉死後料儲仏経目録」に「奉一鉢出家日供養保延六年三月三日」とみえる。
- (25) 保延六年八月付「供養目録」に「一、奉年来日別勤行仏経目録」として「始康和二年至于保延六年宛日別一鉢奉摺写供養毗沙門天王目録」とみえる。
- (26) 『平安遺文』 二九七七号文書。
- (27) 『平安遺文』 三〇九六号文書。
- (28) 『京都叢書』 五。
- (29) 久多の古老によれば、幼い頃は祖母に手を引かれ峰定寺に参詣したといい、現在は徒歩で比較的短時間で行き来できていたという。
- (30) 常盤三寂については、岩橋小弥太「常磐の三寂」(『国学院雜誌』五九ノ四、一九五八年)、玉井幸助「大原の三寂と三人の姉妹」(『学苑』二二一、一九五八年)、武田容子「常磐三寂についての一考察」(『立教大学日本文学』二三三、一九七〇年)、井上宗雄「常盤三寂年譜考―付範玄・三河内侍・隆信略年譜―」(同氏『平安後期歌人伝の研究』、笠間書院、一九七八年)、鈴木左内「藤原為忠の事歴とその子常盤の三寂の出家をめぐる」(『智山学報』三七、一九八八年)を参照。
- (31) 『中右記』長承元年正月二十日条に「伊豆守藤原為業職」とみえる。
- (32) 治承四年(一一八〇)から寿永二年(一一八三)までのものとされる「一品経懐紙」(国宝・京都国立博物館蔵)に法師品・述懐の二首を遺している。
- (33) 『長秋記』大治四年七月七日条に「女房なつとも為忠、いはひを子賀茂女御、○道茂按伊波比手執、賀茂降、両院、資遠大夫、資盛守等許、候臥内奉助起居」とみえる。
位上 藤為業職とあり、同月三十日条に「対馬守藤原為業職」とある。
- (34) 『兵範記』保元三年正月六日条に「位上 藤為業職」とあり、同月三十日条に「対馬守藤原為業職」とある。
- (35) 永万二年八月二十七日に「仁安」と改元している。
- (36) 『撰集抄』第五「近衛院之三位発心ノ事」。

(本学教授 日本古代史)

(キーワード) 五輪塔、久多、峰定寺